



しなやかで、つよい、心のバネを鍛える～「レジリエンス」を身に付ける学校の仕掛け～

校長 風間 浩也

先日、世田谷区立塚戸小学校の2021年度の1年間を追ったドキュメンタリー映画「小学校～それは小さな社会～」を観て、改めて日本の学校教育について多くのことを考えさせられました。まだ公開中のため内容は詳しくは書けませんが、日本の学校教育の中で、どこの学校でも行われてきた日常の取組を通じて、子ども達が大きく成長する姿について映像を通して、学校の日常を客観的に観ることができました。特に私の心を動かしたのが、小学校1年生の女の子が、新たに4月に先輩の立場で迎える新入生の歓迎の演奏ために一生懸命に自分の楽器と向き合う場面です。その取組を通して、先生方に支えられながら、その子は自分に与えられた「責任」を全うし、自分自身の成長を実感していく姿が描かれていました。

日本の学校においては、学習活動以外に、行事、係や委員会活動、部活動など、多くの取組を行っています。それ以外にも、集団生活を送る日々の生活を通して、友達や先生方との多くの関わりを通して、教科書では学べない、数字には表れないこと(非認知能力)を身に付けています。それは、芦花中学校においても同様です。時には、友達とぶつかったり、上手くできなかつたりすることがあるかもしれませんが、先生や仲間を支えられながら、最終的には自分自身の力で困難を克服して自分の成長に繋がっています。

日本だけでなく、世界の学校教育において、今、「20年後、30年後にも通用する生きる力」を身に付けることが求められています。その力を身に付ける際の考え方において、10月の学校便りにも書かせていただいた教育における「エージェンシー」という概念が中心にあります。OECD(経済協力開発機構)は、教育における「エージェンシー」は、「『自分』と『社会』を対峙させ、その間を仲立ちして、うまく調整や行動したり、乗り越えたりするために必要な力」としています。世田谷区においても「世田谷区教育振興基本計画(R6～R10)」において、「キャリア・未来デザイン教育」の基盤となる考え方に同様のことが示されています。

特に、「エージェンシー」を高めるために必要なことは、「折れない心」を鍛えることではないかと考えています。この「簡単には折れない」ことを「レジリエンス」と言います。心理学用語では、「回復力」「復元力」とも言われるものです。イメージとしては、「しなやかで、強いバネ」を想像してください。社会に出てからも簡単に折れない「しなやかで、強い、バネのような心」を芦花中学校で身に付けられるように、芦花中の教育活動を展開しなければならないと感じています。冒頭の映画の小学1年生も、自分の楽器の与えられたパートを責任をもって演奏するという経験を通して、「レジリエンス」が大いに養われたのだと思います。

これまでも、あらゆる教育活動の中に、「レジリエンス」を鍛える仕掛けがありました。それは、日頃の学習活動の中にもありますし、キャリア教育の一環と考えれば、3年生が、今、正に向かっている「進路」についての取組も「レジリエンス」を鍛えるための大きなきっかけとなるものです。先日、2年生の鎌倉校外学習の中でも、上手くいっただ部分と課題が見つかった部分がありました。先生方から厳しく指導される場面もあったかもしれませんが、そのことをバネに、中学校3年で実施する修学旅行に生かしてくれるのだと期待しています。

今年も地域や保護者の皆様におかれましては、芦花中の生徒を温かく見守っていただきありがとうございます。2025年も子ども達の「しなやかで、つよい、心のバネを鍛える」取組についてもご理解、ご協力いただけましたら幸いです。